

多少の負となつて、今や二年目の花牌を撒かうとした時、此處の女中が唐紙を細目に開けて。

「大三輪さんの奥さまに、電話口まで烏渡お出でを。」

「えッ、私ですか。」

「はい。電話が掛りましたんですよ。」

「何處からですか。」

「伺つても、御名前を仰有らないので御座いますよ。」

久和子は當惑の眉を顰めて、「私が居るッてお云ひなの。」

「はい、迂濶申したつたんで御座いますよ。」

「氣が利かないぢやないかねえ。」と、静子は腹立しげな語調で、疑乎と女中を眺め。

「何も申譯が御在ません。」と、女中は悄乎ながらも久和子を見て、「如何遊ばしますか、電話口へ行らッしやいますか。」

「居るとお云ひでしたら、行らない譯にも行きますまい。皆さん、烏渡失禮致しますか。」

久和子が電話口へ往つた後には、三女が頻りに此處の女中の不行届を罵るのである。

「何人にしても困りますは。女主に然様云つて遣りませう。」

静子は二女が止めるのも聞入れないで、帳場の方へと出て行つた。

「此處の女中も悪う御座んすけども、大三輪の奥さんが、此家を人へ御話しなされるも悪う御座いますは。」

花子が斯う云ふと、君子も首肯いて、

「何だつて、此家を人へ教へてお置きなすつたんでせう。」

「いゝえ、教へた事なんかありません。」

久和子は電話口から丁度其處に歸つて来たところで、

「私が此家に居る事を、如何して知つたんですか、實に不思議ですは。」

『お宅からで御座ますか。』

『いえ、店の者なんですが、如何して知つてたんでせう。』と、小首を傾げる。

『御話なすつた事がないのにですか。』と、君子は眉を擡める。

『ですから、不思議で御座ますの。』

其所に静子が歸つて来て、女主に充分女中に注意爲せる様に命じて置いた話
し、花子を促して花牌を撤かせた。

久和子は今の電話の事が氣に掛るのに、手後は附かず、おきは悪し、見る／＼苦
戦に陥つて、此一年も見事失敗に終つた。

久和子は三年ならずして、百本以上の失敗を招いたので、暫時休戦んで見よう
かと思つたが、今度の一年には是非吟味を取つてと、また立向はんとした時、ま
た女中が取次に入つて来た。

『大三輪さまの奥さまに、鳥渡お目に掛りたいつて方が入つしやいまして。』

『えッ、私に逢ひたいつて。』と、久和子は顔色を變へた。

静子は躍起となつて、「先刻も彼様に頼んで置いたのに、何故居らつしやらない
て云はないんだよ。お神さんも御居でだらうのにねえ。』

『居らつしやらないで申したんですけれども、先刻電話で御談話を爲すつて、居
らつしやる事を知つて来たつて仰有たんですもの、お神さんも困つ了つたんで御
在ますよ。』

『それで、私が居るつてお云ひなの。』

『はい。御目に掛つても、差問の無い者だからつて仰有つたものですから、居ら
つしやるつて申しました。』

『何と云ふ人なの。』

『御目に掛れば御分りになるからつて、御名前も仰有らないんで御在ますよ。』

『困るはねえ。』と、久和子は垂頭いて考へながら、「詮方が無いから、逢ひませ
うよ。』

『此方へ御案内申しますんですか。』

「いえ、何處か、此室と離れてる座敷へ通して下さいな。」

「はい。」

女中は静子君子等の小言を浴びながら、彼方へ行つて了つた。

「何卒御三人で、始めて居らして下さいまし。」

久和子は前に電話を掛けたと云ふからには、多分吉原順太郎が尋ねて来たのであらう。順太郎が如何して私が此家に居る事を知つたらう。電話を掛けたのさへ、入らぬ出過と思ふのに、逢ひにまで来るとは、何と云ふ失禮な仕打だらう。此様處まで尋ねて来る様な用事が、私と彼人との間にあらう筈が無いのに、何の爲に尋ねて来たのか、逢つた様子では、思ふさま其出過た仕打を宥めて遣らうと、斯う思ひながら表の方へ廊下を辿つて来ると、今其人を案内したばかりらしく、先の女中が一室から出て来た。

「此室にお通申しました。」

「さうですか。」

久和子が其室に入つて見ると、其處に居るのは果して順太郎であつた。

「順さん、何だつて此家にお入来なんですか。」と、久和子の語調は取つても附けぬ様だ。

「叔母さん、先刻は電話で失禮致しました。」と、順太郎は疊に兩手を突いて叩頭を爲た。

「其様事は如何でも可いんですが、と、久和子は始めて坐りながら、「用でも御在りですか。」

「はい。」と云つたが、微笑を含みながら、「別に用と云ふのではありませんが、御迎に上つたので御在ります。」

「えッ、私を迎に。」

久和子は一方ならず驚いた。迎に来たと云ふからは、迎に寄越した人がなければならぬ。私を迎に寄越すのは、夫より外に其人が無いのだから、さては私が此家に居る事を、夫が何人からか聞き知つたのに違ひない。果して然様だとすれば

身の上に一大事であると、服には疑乎と順太郎を見ながら、胸は躍るのであつた。
 「順さん、何人が貴方を私の迎に御寄越しでしたの。」と、久和子は出来るだけ語調を沈着けて居た。

順太郎は何でも無い語調で、「何方から命けられたと云ふのではありません。唯私が御迎に上たんです。」

久和子はひつとして、「何人も命はないのに、お前さんが勝手に迎に來たんですつて。」

「さうです。」

「何だつて其様出過ぎた事をお爲なのです。」

久和子が屹度見た眼は、順太郎が今までに、此人に此様険しい眼が出来ようとは思はなかつた程だ。けれども、心の中では、以前の順太郎だと思つて威嚇したつて、今の乃公に何の効があるものかと私かに冷笑ふのだ。

「順さん、用事も無いのに、出先に電話を掛けたり、押掛けて來たりして、私を

女だと思つて、餘り失禮な事をお爲だと後悔お爲ですよ。」

順太郎は頭を掻きながら、「叔母さん、怒つて下さつては困りますね。」

「困るのは、お前さんが出過ぎるからさ。」

「ですけども、私は悪意なんか些も無いんですよ。唯叔母さんの御爲を思つて、失禮だつたか知れませんが、能々御迎に上がったのです。」

「御親切さまに難有う。」と、久和子は冷笑つた。

「叔母さん。」と、順太郎は能くもひつとした語調で、「貴女が此家に何を爲さりに居らして居るか、知つて居る人は知つてますよ。」

「……………」

久和子は横を向いて居る。

「叔母さんが此様家に入を爲すつて、何様事を爲てお居でなされるか、叔父さんも御存知でなされやア、芳子さんも知つてお居でなないでせうよ。叔父さんも、叔母さんは慈善會や其他の、公共の利益になる會の事で、御出掛だと思つてお居でなされる

でせうよ。芳子さんも然様思つてお居での様ですが、併し芳子さんは大層心配してお居でなんですよ。今日なんでも、叔母さんが御出掛けなさるのに入道に、芳子さんがお歸りだつたのですが、」

「順さんは、それでは、芳子さんの指揮を受けて、私を迎にお出でなのね。」と、久和子はまた険しい眼を爲た。

「其様事はありません。芳子さんが、叔母さんが此家に居らつしやる事を、知つてお居での筈がないでせう。」

「知つてお居でだつて可いんですよ、何も悪い事を爲て居やしませんもの。」

「其はさうでせう。」と、順太郎が斯う云ひながら久和子を見た目付は、憎いものを見るかの様で、「叔母さん、叔母さんが今、奥で爲すつて居らつしやる事は、何の御相談か知りませんがね、來て居る人達は大概知れてますよ。」

久和子はぎよつとして、覺えず順太郎の顔を凝視めた。

「伊藤とか云ふ裁判官の妻君に、三田の海軍士官の妻君が御居でせう。それから

……さうです挿花の師匠……烏森に居る挿花の師匠の静子つて女も居るでせう。

此人達が重立つた御仲間でせう、ねえ叔母さん。」

順太郎が如何して集つて居る人達の、名から身分までも知つて居るのかと、久和子は可怖しくなつて、息をへ靜かには吐き得なかつた。

順太郎は久和子の様子に、態を微笑むで、

「今日も静子なんて人達でせう。」

久和子は當惑しきつて垂頭いて了つた。

「叔母さん、私はね、叔母さんの御迷惑になる様な事があつちや済みませんから、お先に失禮しますよ。ですがね、成るだけお早くお歸りなさる方が可いと思ひますよ。」

「難有う。」と、久和子は依然垂頭いて居る。

「それではお暇致します。」

順太郎が立たうとしたのを、久和子は止めて、

「順さん、島渡待つて下さい。」

「はい。」と、順太郎は立ち掛けた腰を落した。

「順さんは私の此所に居る事を、如何して御存知でしたの。」

「それは知つて居るんです。」

「何人からお聞きでしたか。」

「それは其の何です、其の非常に苦心したんですよ。」と、順太郎は其實返辭に窮しながら、「叔母さんが築地の太田と云ふ家に、度々お出でなさるつて聞いたのですよ。東京全體から云へば築地は狭いんですが、唯太田とはかしぢや、見當が着きませんや。築地にだつて太田と云ふ家は幾軒もあるだらうし、唯太田ぢや困るが、電話帳を調べて、築地の太田と云ふ家に片端から電話を掛けて見たんですよ。すると、三軒目で、大三輪さんの奥さんが居らつしやるつて云ふんでせう、私は何様に嬉しかつたか知れませんが。」

久和子は順太郎が其様手数を掛けたのかと、其執念深いのに驚きながら、

「さうでしたか。それで何ですか、私が太田と家に能く行くつて云つた人は。」

「其人ですか。」

「やつぱし商店の人でせうねえ。」

「いえ、違ひます。」と、順太郎は彼内海勝三から聞いたのであるが、さうとは云へぬので困りながら、「其人は叔母さんの御存知でない人です……島森に住んでる人です……静子と云ふ插花の師匠の近所だとか云つてました。」

「何と云ふ人ですか。」

「叔母さん、其人の名だけは御免が被りませう。自然静子に知れでもすると、其人に氣の毒です。此だけは御免を被ります。」

順太郎の斯う云切つた氣勢が、到底打明けさうも無いので、久和子も此上問ふも詮なしと思つたのか、首肯しながら、

「芳子さんも、私が此家に居る事を。」

「えつ、何ですつて。」と、順太郎は眼を睜つて、「叔母さんが此所に居らつしやる事

を、芳子さんが知つてると仰有るんですか。叔母さん、叔母さんは私を、順太郎を其様男だ……叔母さんの御迷惑になる事を、何人へでも曉べる様な男だと思ひなさんですか。と、怨むが如く久和子を見た。

「順さん、さう聞いて下すつちや困つてよ。」と、久和子は順太郎を怒らしてはならぬと顔も語調も和らいて「芳子さんが知つてお居るか如何かと思つて、烏渡伺つて見たうけなんです。」

「やつぱし同一ぢやありませんか。私が話さなさまや、芳子さんがお知りの筈は無いでせう。叔母さん、私は叔母さんに其様男と思はれてるかと思ふと、實に残念です。私は叔母さんのお爲と思つて、辛と此家を尋ね出したんです。詮方がありません、何でも思つて下さるが可いんです。」

順太郎は突と立上つた。

「まア、順さん。」

久和子は順太郎の袂を確と握つた。

順太郎は久和子に捕へられた袖を、引放さうと争ひながら、

「叔母さん、何卒放して下さい。此家に来たのは私が悪かつたんです。歸ります。ですが、叔母さんに断つて置きますがね、順太郎は人の秘密を發いて、それを世間に吹聴する様な男ぢやありませんよ。此迄もさうですが、今後だつて然様です。叔母さんに此家で御目に掛つた事は、芳子さんにだつて何人にだつて、誓つて漏しません。此だけお断り申して置きます。何卒放して下さい、放して下さい。」

久和子は尙ほ捕へた袖を放さず、

「順さん、勘忍して下さい、私が悪う御座んした。順さんが親切に爲て下さつたのを、私の邪推で今の様な事を……眞箇私が悪かつたんですから、此通謝罪ます。此通です。」と、片手を疊に突いて、頭まで下げるのだ。

順太郎は久和子に引据ゑらるゝまゝ、ぐたりと坐つて腕組をして、垂頭いて唇を噛んで居るのだ。

「順さん、何卒怒らないで下さい。貴方の親切を、私は邪推して居たんです。」

を、芳子さんが知つてるのと仰有るんですか。叔母さん、叔母さんは私を、順太郎を其様男だ……叔母さんの御迷惑になる事を、何人へでも喋べる様な男だと思ひなされるんですか。』と、怨むが如く久和子を見た。

「順さん、さう聞いて下さつちや困つてよ。」と、久和子は順太郎を怒らしてはならぬと顔も語調も和らいて、「芳子さんが知つてお居てか如何かと思つて、鳥渡伺つて見たうけなんですよ。』

「やつぱし同一ぢやありませんか。私が話さなまや、芳子さんがお知りの筈は無いでせう。叔母さん、私は叔母さんに其様男と思はれてるかと思ふと、實に残念です。私は叔母さんのお爲と思つて、幸と此家を尋ね出したんですよ。詮方がありません、何でも思つて下さるが可いんです。』

順太郎は突と立上つた。

「まア、順さん。』

久和子は順太郎の袂を確と握つた。

順太郎は久和子に捕へられた袖を、引放さうと争ひながら、

「叔母さん、何卒放して下さい。此家に来たのは私が悪かつたんです。歸ります。ですが、叔母さんに斷つて置きますがね、順太郎は人の秘密を發いて、それを世間に吹聴する様な男ぢやありませんよ。此迄もさうですが、今後だつて然様です。叔母さんに此家で御目に掛つた事は、芳子さんにだつて何人にだつて、誓つて漏しません。此だけお断り申して置きます。何卒放して下さい、放して下さい。』

久和子は尙ほ捕へた袖を放さず、

「順さん、勘忍して下さい、私が悪う御座んした。順さんが親切に爲て下さつたのを、私の邪推で今の様な事を……真箇私が悪かつたんですから、此通謝罪ます。此通です。』と、片手を盛に突いて、頭まで下げるのだ。

順太郎は久和子に引据ゑらるゝまゝ、ぐたりと坐つて腕組をして、垂頭して唇を噛んで居るのだ。

「順さん、何卒怒らないで下さい。貴方の親切を、私は邪推して居たんですよ。」

何卒勘忍して下さいよ。』

順太郎は垂頭いたまゝ、少し頭を下げて、承諾の意を示した。

久和子は吻と息を吐いて、『順さん、貴方が私に此處でお逢ひの事を、何人へも云はないと云つて下さつたんで、私は始めて安心しましたけれどもね、芳子さんにも知れようものなら、私面目なくつて、如何しようかと思ひましたは。私ね、順さん、今日と云ふ今日眞箇後悔したんですよ。今後は決して此様な……二度再び此様な足踏しようと思せんからね、貴方の胸一つへ藏めて、決して他言を爲て下さらない様に……また怒つて下さつちや困りますけれども、何様事があつても、貴方の胸一つに藏めて置いて頂戴よ。その代にはね、私も貴方に其だけの御禮は致してよ。』

順太郎は組んで居た腕を解して、両手を正しく膝に置いて、

『私はお禮なぞを受けようと思つて、』

『それは然様でせうけれども、久和子ははら／＼しながら、『貴方が禮を御望み

なさるなんて、私夢にも思ひません。人の親切を唯受けて居る筈のものでは無いと思ひますから、それで御禮と云つたのですけれども、悪かつたら勘忍して頂戴よ。』
『それなら解りました。叔母さん、私はね、叔父さんの御世話になつてますから、叔父さんと叔母さんの爲になら、何でも辭さない意です。今日だつて、出過ぎた事だとは思つたんですが、叔母さんが此家にお出でなさる事を、私に話した人見たいに、世間には知つてる者もあるんですから、自然商店の人の耳に入つても悪からうし、叔父さんに知れちや、尙は大變だと思つて、生意氣でしたが、叔母さんに御目に掛りに上つたんでした。叔母さん、私はね、叔母さんに禮を云はれたかアありませんけれども、叔父さんへ何卒ねえ……叔父さんの御氣に入らなまや、叔父さんの爲に働きたいと思つても、働く機会がありませんでせう。私は其を心配してゐるんですよ。』

久和子は頻りに首肯いて、

『能う御然んす。思へば思はるゝでね、私も順さんに盡しますよ。』

「何卒御願ひ申します。」

「私も直ちに歸りますから、順さんは一足先にね。」

「はい。それでは御暇致します。」

順太郎は久和子に別れて、太田を出ると共に、吻つと息を吐いて、乃公は今日の様な事は初めてなのに、能く彼丈喋べれたつけ、と覺えず類笑みもしたが、雖て不愉快らしい顔を爲ながら、悄然と立去つた。

(十四)

内海勝三は店用で某省に出掛けて、今しも丁度三十間堀の店に歸つて來ると、三浦太郎と田島庄三の二人が暖爐を圍んで話して居たところだ。

「れこは留守だと見えるね。」

勝三が押指を出して見せると、太郎も庄三も得意さうに首肯いた。

「吉見君も留守かね。」

太郎は莞爾笑ひながら、「だから、斯うして居る譯なのさ。大將にも驚くが、大野治長には真箇可厭になつたからね。」

勝三も笑ひながら、「吉見を大野治長に見立たのは妙だね。田島君、君が見立てたんだらう。」

庄三は頭を掻きながら、「見立つたところで、餘り名譽でもなからうさ。」

「ところで、淀君に就いて、何か珍聞は聞込まないかね。」と、太郎は勝三の顔を見る。

「いえ、更に聞込まないね。」

勝三は斯う答へながらも、久和子の事から早くも吉原順太郎の上に思及び、店內を見廻しながら、

「吉原君が見えないが、私が出掛けた後で、何か用でも出来たと見えるね。」

「さうですよ。何か大將の命を受けて出掛けたんですよ。」と、庄三は小首を捻りながら、「それに付いて、今も三浦君とも話して居たんだが、吉原君が頃日急に大

將の信用を得て来た様ですな。』

『それに、彼先生の態度も急に一變して、大いに活動爲始めた様だね。』と、太郎も相槌を打つた。

勝三も頭を傾げながら、

『私も大いに不思議だと思ふんだ。尤も些と事情はあるんだが、餘り變化の仕方が烈しいよ。来た當座はひんねりむつり爲てえて、碌に口も利かなかつたんが急に御世辭は能くなるしさ、何だか衣帯が分らないね。』

『だから、三浦君と大いに論評して居たんです。どうでせう、其事情つて奴を伺ひたいんですが。』

『なアに、其は何でもないんで、私も能くは知らないのさ。』

勝三が返辭の仕振を、太郎は早くも怪しと見て、

『内海君、何も其様に、我々の仲間に隠さないだつて、可いちやアないかね。』

『いや隠すと云ふ譯ぢやないんだが、私も又聞なんだから、誤聞を傳へても不可

いからね。』

『誤聞だつて可いちやないか。眞初から又聞だと斷つてるんだから、君が虚構を爲て話すんだとは、私だつて田島君だつて思やしないよ。それなら可いだらう。先づ又聞の誤聞かも知れないと承知してゐて聞くんた。賑かして話すんだもの、話す者にも聞く者にも、罪がなくつて可いちやアないかね。』

『三浦君の云はるゝ通、座興として伺はうぢやありませんか。』と、庄三もせがむのだ。

『それなら話すがね、今云つた様に、又聞の上に、私の想像を附加へるんだから、其意で聞いて貰ふんだよ。』と、勝三は仔細らしい顔をなし、而も微笑を含みながら、『大將の家に、ほら美しい娘があるだらう。』

『あるともく、令嬢若子の君ッて云ふ。』

『事情と云ふのが、其若子の君に關係してるから妙だらう。』

『成程珍聞だ。縦んば誤聞にしても、充分聞くだけの價值があるね。それから。』

太郎も庄三も共に椅子を進めた。

勝三は突如に寒氣を覺えたかの如く戰慄ひして、「田島君、暖爐に石炭を投れちやア如何だね。いやに寒くなつて來やアがつた。」

庄三は椅子を離れながら、

「うんと投込んで遣りませう。其代に、今の續話を願ひますせ。」

「無論話する。熱い茶でも欲しいもんだ。」

「よろしい。茶は僕が命じよう。」

太郎は給仕を呼んで茶を命じて、

「内海君、吉原君と芳子の君との、其事情つてのを、委しく早く話して呉れたまへ。」

「委しく早くと來ちやア、中々難かしいね。」と、勝三は勿體らしき咳拂を一ツ、

「其事情と云つた所で、何も今驚天動地の大事件が發つてゐるつて譯ぢやないがね、芳子の君の方から毎日御出掛の、何卒辛棒して頂戴の十度も口説れるもんだか

ら、先生大いに乘氣になつて、活動を始めた譯なんだね。委しく早くつて所で、先ア此様ものさ。」

「そいつは素的だ。驚天動地以上だね。」

「へ、え、毎日出掛けるんですかい、君を思へば徒跣でんで。」

「尤も高樹町から原宿と來てるんだから、學校の往復に寄れるんだからね……お茶か、よし來た。」と、勝三は給仕が運んで來た茶を一口飲む。

太郎も同じく茶を飲みながら、

「さう事が極つてりやア、僕だつて大いに働くね。」

「私だつて然様でさア。もつと正直に而して、もつとハイカつて、毎日此方から聚樂の御所へ伺候しますア。ねえ、三浦君。」

「は、ア、それで解つた。」と、太郎は覺えず横手を打つて、「道理で、頃日大野治長の様子が變だと思つた。吉原君に對して、いやに意地悪く當ると思つたら、其所爲なんだな。」

勝三は首肯き。

「君も其處に気が着いたかね。何しろ、可怖き競争者が飛出したんだから、執權大野治長と澄しても居られまいさ。」

「ですが、大野の方には淀殿が控へてるから、七分の強味がありますな。」

「ところが、淀殿も何やら大野方ぢやない様だよ。」

「へ、え、如何してですかね。」

「叱ッ、叱ッ。」

太郎の警戒を聞くより、勝三も庄三も見返ると、吉原順太郎が入口の扉を開けて入つて来た。

「吉原君、此所へ来たまへ。大いに待つて居たんだ。」

太郎が招くので、順太郎は何の氣なしに暖爐の傍に来て、

「三浦さん、私を待つてお居でなすつたつて、何か御用ですか。」

「さう真面白に出られちやア、反つて辟易するね。は、は。」と、太郎は勝三の顔

を見た。

庄三も微笑みながら「なアに、私が吉原さんなら、高樹町に日参しようつて云ふんです。」

「高樹町へ日参なさるんですつて。」と、順太郎は小首を捻つて「高樹町つて、社長さんの御宅の事ですか。」

太郎と庄三は計らず口を揃へて、「其様に真面目ぢや困つ丁ふね。」

「私には何の事だか解りません。」

順太郎がきよとんとして居るので、太郎と庄三は一齊笑出した。

勝三も笑ひながら、

「吉原君、君の様に真面目な人は、鳥渡した事も氣に掛けるものだが、別段君の噂を爲て居たと云ふ譯でもなし、況して悪評なんぞ云ふ筈もないから、本統に氣に掛けて呉れちや困るよ。」

順太郎は一入顔を赧めて、

「いえ、別に氣に掛けたと云ふ譯ぢやありませんが、諸君の仰有つた事が、何の事だか、鳥渡解らなかつたもんですから、御挨拶が出来なくつて困つてたんです。は、は。」

太郎と庄三は聲を合せて又笑つた。

「君達が笑ふから不可いんだよ。」と、勝三は二人を目配で制して、「吉原君、全然君の噂を爲なかつたと、云ふのも虚言だがね。」

「私か如何したと仰有るんですか。」

「それ、其だから、君には迂濶口が利ないんだよ。實はね……君が氣に掛けるから云つたふがね、君が商店に初めて来た頃には、何だか可厭に陰氣だつたのが、頃日急に活動爲出して、全然別の人の様に見えるもんだから、實に不思議だ、如何したんだらうつて、三人で噂を爲て居た所へ、丁度君が歸つて来たんだよ。」

順太郎は心中ぎよツとしながら、素知らぬ體に莞爾打笑み、

「然様でしたか。其様事でしたか。は、は。唯それだけなんですわね。」と、疑乎と

勝三の顔を見た。

太郎と庄三はまた笑つた。

「君達は何故其様に笑ふんだよ。君達が笑ふもんだから、吉原君が氣に掛けるんだよ。」と、勝三は二人を制しながらも、聲こそ立てないが自分も打笑み、「實は其外に、私が鳥渡喋つた事があるんだよ。」

「えッ。」と、順太郎は覺えず顔色を變へて、内海が渡瀬から聞いた我父に関する秘密を、三浦田島の二人へ話したのではあるまいかと、一方ならず驚いたのである。

太郎は順太郎が顔色を變へたのを、芳子の事を早くも察したからであらうと、早合點したので、

「へへ。吉原君、君の艶福は大いに羨むべしだよ。何か奢らなげやア、承知しなうよ。」

「えッ、艶福ですつて。」

「何です、其様にしらをきつて。」と庄三は嘲る様に打笑みながら、「彼様美人に看護を爲て貰へるなら、私なんぞ毎日病氣になつて居てえ位です。あは、」

「何の事だか、私には解りません。」と、順太郎は眞確解し得ないらしい。

「勝三は笑ひながら、「私が芳子さんの事を話したんだ。」

「えッ、芳子さんの事ですつて。」と、順太郎は顔を赧めながらも苦笑して、「其様事なら幾許でもお云ひなさい——事實飽福なんぞつて云ふ譯ぢやないんですか、私が辯解しないでも、時が必ず辯解して呉れるでせう。」

「巧く逃げようたつて、さうは行かないよ。」

太郎は庄三に顔を見合せて、尙ほ調戲はうとした時、勝三は店主の大三輪長純が店内に入つて来たのを認めて、叱々と警めたので、一同直ちに暖爐の周圍を離れた。

長純は襟毛の二重外套に括まり、黒の山高帽子を被つたまゝ、出迎へた店員の顔をじろりと見て、

「吉原、私の室へお行で。」

「はい。」

順太郎は長純の後に従いて、社長室へと入つた。

長純が順太郎に對する待遇は、頃日来順に一變したのである。

「順さん、其椅子へ掛けるが可い。今日は大分寒い様ぢやツたね。」

「はい、左様で御在ます。併し、風が御在ませんので、多少淺き易い様で御座ます。」

「左様ぢや。此上に北風を浴せられては、とても敵はんよ。」

長純が毛皮の襟を付けた外套を脱いで、傍の柱の釘に掛けようとするのを、順

太郎は隙さず其外套を乞受け掛け了つて、また元の場所に立つた。

「社長さんへ申上げますが、」

長純は早くも遮つて、「順さん、お前に限り、私を社長と呼ばんでも可いのぢや。」

「へッ。」と、順太郎は不思議さうに、

「私に社長さんと御呼び申すなど仰有るので御座いますか。」

「さうぢや。私はお前を他の社員と同一に見て居らんのぢや。」と、長純は一入親しびな語調で、「遠慮せんで、其椅子に掛けるが可い。」

「はい。」とは云つたが、順太郎は尙ほ立つたまゝで、「私は唯今の御語を伺つて、實は迷つて居るので御座いますが、」

「如何してぢやね。」

「私が御店に使つて戴く事になりました、初めて出勤致しました時に、此迄の様に、伯父など、申してはならぬ、社長さんと御呼び申す様にッて、」

「いや、彼時は彼時ぢや。彼時の事は忘れるが可いのぢや。實はお前を試す爲めに云ふたのぢやから、氣に掛けんが可いよ。は、は、は、は、」

順太郎はさも喜ばしびに、「それでは、以前の様に、叔父さんと御呼び申しまし

ても。」

「無論可いのぢや。實は、お前を試る爲に、態と嚴格な態度を取つて見たのぢや。お

前の勤務振は、大いに私の氣に入つた。お前は思つたよりも機敏で、精勤はする、正直ではあり、大いに信用するに足るのでな、流石は吉原さんの子息ぢやと、私も嬉しいのぢや。私ばかりではない、宅でもな、芳子は勿論ぢやが、久和子も大層お前を賞めて居るぞ。」

「私の様な者を……難有う御座います。」と、順太郎は兩手を膝まで下げて、謝意を述べた。

「それでな、私はお前を、今日から私の秘書役——秘書官に爲るでな、お前も其合で、精勤して貰ひたいのぢや。」

「私で御座いますか。」と、順太郎は暫時長純の顔を目成つたが、太息を吐くと共に「私に其様大役が——秘書官などを申す大役は、到底勤らうとは思いませんので、」

「いや、私の鑑識で命ずるのぢやから、辭退する事はならん。社員へ今、其事を發表する意ぢや。」

長純が呼鈴を打くと、給仕が來ので、先づ内海を呼ぶ様にと命じた。

聽て内海勝三が恐るゝ入つて来たのを、長純は順太郎と列立たせて、

「内海、今日から吉原を私の秘書役に命じたでな、お前から、三浦田島其他の者に傳へて呉れるが可い。吉見へは、いまに歸店つて来たたら、私から直接に申開けるで、兎に角一統へ傳へて呉れる様にな。」

「はい、畏まりました。」

「それだけの事ぢや。」

「はい。」

内海勝三は意外なる順太郎の昇進に吃驚して、そこくに社長室を出た。

太郎庄三等は勝三が社長の室に呼ばれたのは、何の用であるかと噂合つて居たので、勝三が社長室から出て来た扉の音を聞くより、何れも見返つて様子如何にと目成つた。

勝三の笑顔を見るより、太郎は早くも椅子を向け變へながら、

「内海君、大分得意の様だが、何の用だつたかね。」

「何の用つて君、追々我黨の世の中となつて来たんだ。」

「何ですつて。」と、庄三も乗出して、「我黨の世になつて来たつて、如何云ふ次第なんです。」

「如何云ふ次第だつて、實に愉快なんだよ。」と、勝三は社長室を見返りながら、

「大野治長龍大いに衰へて御出でなすつたから、實に愉快ぢやないかね。」

「え、さうかい。それは愉快だ。」と、太郎も大得意で、「で、其譯つてのは。」

「吉原君が今日、秘書役に擧げられたんだ。だから、從來の様に、大野治長の専横を容さない事になつたんだから、大いに祝杯を擧げようぢやないかね。」

「賛成です。」と、庄三は覺えず手を拍いた。

「吉原君を、今夜何處かへ招待して、盛んに祝さうぢやないかね。」

「よからう。三浦君と田島君の提案に賛成の方は。」と、勝三は一統を見廻すと、何れも手を擧げて賛成の意を表して居る。

其處へ吉見幸一が家外から歸つて来た。

『大野治長龍大いに衰ふか。』

何人か隅の方で、低聲に斯う云つたので、聲を上げて笑ふものこそなかつたが、何となくさうわめきが、幸一に異様の感を興へたのである。

幸一は勝三に對ひ、『内海君、何が始つたのかね。』

『いえ、何が始つたと云ふ譯ではないんですが、』と、勝三は幸一の卓子の前に立寄り、何様顔をするかと疑乎と見詰りながら、

『吉原君の爲に、大いに祝さうと云ふんでしてね。』

『なに、吉原君の爲に祝すつて。』と、幸一は不思議さうに眉を擡げた。

『さうです。大いに祝さうと云ふんです、吉原君が秘書役に昇られたので。』

『えッ、秘書役に、吉原が。』と、幸一の顔色は看々變つた。

太郎が此處ぞと云ふ語調で、『吉見さんも無論御賛成でせうね。』

幸一は太郎の問は耳にも入れず、

『で、吉原君は何處にお居でかね。』

『社長さんの傍にお在です。』

『さうかね。』

幸一が社長室を見返つた途端に、順太郎が出て来た。

『お、吉見さんが御居でなすつたんですか。』

順太郎が幸一の前に來るのを、幸一も椅子を離れて迎へて、

『吉原君、御目出たう。』

順太郎は顔を赧めて、

『餘り意外ですから、平に御辭退申したんですが、社長さんが御免が無いので、如何したものかと、實に當惑して居ますのです。』

『いや、御受けなさい。私なぞも至極適任だと歓迎します。諸君が今夜祝杯を呈しようとして、切角協議して居られる所です。』

『吉原さん、吉見さんの仰有る通り、私は勿論ですが、三浦君、田島君、其他の諸君が非常に喜んで、今夜御招待申す事に爲たのですが、御承諾下さるでせうね。』

「吉原さん、御愛でたう。」

「吉原さん、御愛でたう。」

彼方からも此方からも一時に祝辭を浴せられたので、順太郎は一々返辭もなしかね、唯顔を赧めるのみで、所在なさうに見えた。

(十五)

吉原秘書役の爲に開いた大三輪店員の祝宴も、今は既に終りに近く、坐に残れるは、吉見内海三浦及び田島の四人に、客たる吉原順太郎のみとなつた。

順太郎は飲めぬ口に、祝杯々々と強着けられたので、嘗めるばかりに爲て居たけれども、今は呼吸苦しいまでに動悸が高まつて居るのだ。

順太郎は席を離れて、吉見と内海の前に坐り、

「吉見さん、内海さん、今夜は難有う御在りました。私は遠方ではありますし、御覽の通酌即して居ますから、此で失禮致したいので御在りますが……皆さん、御先

へ失禮致します。」

「君はまあ可いさ。」と、吉見幸一は短衣の隠から時計を出して見て、「まだ漸と九時だ。君が歸つた日には、諸君の興が一時に覺めて了つて、折角の盛會が龍頭蛇尾に終らうと云ふもんだ。君はまあ居たまへよ。」

「さうだとも」と、内海勝三が呂律も亂れながら「吉原さんが歸るつて事はないよ。え、何人の爲の今夜の會なんだ。君が居なくなつちやあ、飲んでる酒が無意味になるぢやアないか。居たまへ〜。いや、歸らうたつて歸さないよ。」

「吉原さん、まだ九時だつてえのに、居て下さいな。田島が御願ひ下さア、此通拜み下さア。」と、田島庄三も掌を合せようとしては外しく、ぐらつく體を保持つて居るのだ。

「兎に角席に復つて呉れたまへ。」と、三浦太郎は順太郎の手を取つて其席に着かしめ、其前に胡坐を組んで、「一杯頂戴しよう……おい、お酌だ。」

「はろ。」

二人聘ばれて居た藝者の一人、八重子と呼ぶ十八九のが、順太郎が取上げた猪口に注がうとしたが、徳利を控へて、

「貴方冷たくなつてますでせう。御明けなすつた方が可いは。」と、杯洗を手近へ押遣る。

順太郎は黙つて、杯洗で濯いだ猪口を太郎へ献さうとするのを、太郎は手を横に振りながら、

「いや、其様猪口は眞平だ。清く乾したやつを願ひたいね。」

順太郎は頭を掻きながら、「私は此通酔つて、此上飲んだ日にやア、」

「それに一杯、其猪口に一つ清く飲んで呉れりやア、後は僕が引受けるよ。」

「貴方、お一杯だけ、食上れ。」と、八重子は順太郎に配目をして、猪口を出させて軽く注いだのである。

「では、此一杯だけですよ。」

順太郎は念を押して、一息に喫乾した猪口を、太郎へ呈す。

「さア、お酌だ。」

太郎が八重子に酌をさせて居ると、此方には勝三が小衆と呼ぶ二十二三の藝者に酌をさせながら、

「實に愉快だ。今夜の様に愉快な事は、頃日無いんだ。吉原君萬歳、ばんざアい。」

勝三が順太郎が萬歳を高く唱へると、幸一は突と立上つて、

「諸君、私はお前へ失敬する。」

「吉見さん、まア宜しいでせう。」

幸一は順太郎が止めるのを耳へも掛けず、帽子を取り、インパネスを抱へて、其室を出で去るのだ。

「吉見君、まア可いでせう。」

順太郎は止めながら、却つて送るさまとなつて、幸一に續いて廊下へ出ると、其後に八重子が従きながら、

「御歸りになりますよ。」

幸一が順太郎と藝者とに送られて、其室を出て尙だ廊下に足音が爲て居るのに、太郎は掌を敲つて笑出して、

「今夜の、大野治長の面付ッちや無かつたね。モルモットが熊の膽を呑めたつて面が、正に彼面だ」は、あはは、は、は、は。」

「真箇だ。モルモットが熊の膽を呑めたは嶄新だ。」

勝三も庄三も同じく掌を敲つて笑ふので、小かねも誘はれて笑ひながら、

「随分お口が御悪いはねえ。何方の事なんですよ、大野治長さんて。」

「大野かね、今歸つた男が、執權大野治長ッてんだ。序にお酌だよ。」と、庄三は猪口を出す。

小兼は庄三に酌をしながら、「さう、今御歸んなすつた彼ぎくしやく爲た方が、大野治長さんですつて。私また、今一人の温和しい方の事かと思つて、」

「心配をしたはッて云ふのかい。」と、庄三は調戲語調だ。

「だつて、如何にも、温和くつて、無益な口數もお利きなさらないし、お酒だつて」

悪癖をなさらないし。」

「男振だつて、好いたらしいし、とおいでなさるんちやアないかい。」

「それは然様よ、今夜の御一座の中ではねえ。」

「いははや、三人とも落第とは御情ないですな。は、は、は。」

「おい、大いに爲ないか。」と、勝三は熊と眼を据ゑて小兼を睨んで、「今夜の一座の中では何だい。我輩と云ふ者が居るよ。我輩と云ふ好男子が見えないのか。」

「おや御免なさい、貴方だけは別なんだよ。は、おは、は。」

「おやく、内海君、どうく除物にされッ丁ツたね。」

「おやッ、私の傍惚が入らしたよ。貴方此所へ居らしたよ。」

「幸一を送つて今戻つて来た順太郎に、小かねが聲を掛けると、勝三等三人は、ようくと囁すのだ。」

順太郎は何が何やら些しも分らず、何時もの眞面目な語調で、

順太郎は何が何やら些しも分らず、何時もの眞面目な語調で、

「吉見さんが諸君へ宜くと云ふ事でした。私も誠に失禮ですが、」

「まあ可いぢやないかね。」と、勝三は順太郎へ猪口を差しながら、「私も溜池まで一緒に行くんだから、まあ待ちたまへな。」

「貴方、今少時居らっしゃいよ。此方が御一緒にいらつしやるつて云ふんですから、まあ能う御座んすでせう。」

「貴方居らっしゃいな。」と、八重子も小兼に語を添へた。

「よう〜。」と、太郎と庄三とはまた喋すのだ。

「内海さん、御存じの通り、母が心配しますから、實に失禮ですが、」

「待ちたまへ、私も行くから。」と、勝三も今は強ては止めず、「諸君、退散としようよ。」

「あらッ、皆さんも御歸んなさるんですか。いけないはねえ。貴方や、また入らっしゃいよ。」

「はい、難有う。」と、順太郎は頗る真面目だ。

「小かねめ、大概に爲ないか、見つどもねえ。」

太郎は態と小兼の肩を突きながら立上つた。

四人は其家を出ると、二人づゝ二つに分れて、順太郎と勝三は銀座通に出て、新橋の方へと歩を移した。

「吉原君、數寄屋橋まで歩いて、外濠線に乗る事に爲ようね。」

勝三が斯う云ふと、順太郎は立止つて、

「外濠の電車に乗るのなら、數寄屋橋まで行かないだつて、弓町を突切つて、西紺屋町の河岸へ出て、彼所の停留場で乗つた方が近いでせう。」

「これは恐入つた。内海先生大分御酌訂だと思える。あはは〜。」と、勝三は往來の人を驚かすほど高聲に笑つて、「では、向側へ越えろとしよう。」

銀座二丁目の角を、往來の電車の絶間を計り、向側へ渡つて弓町の方へ入ると、月夜から闇夜に移つた様に暗くなつた。

「吉原君」と、勝三は順太郎に平と體を寄せて「君の手腕には、内海大いに敬服

したですねえ。」

「えッ、」と、順太郎はぎよつとして、「手腕て何ですか。私に手腕なんて、何があ
るもんですか。」

「なに然様で無いさ。私は眞箇敬服してゐるんだ。」と、勝三は小聲になつて、「君が
大三輪商店に入られてから、幸と一ヶ月になるならすなんだ。社長が最初、氣の
毒なほど君を冷遇して居たんで、私は大いに君に同情して、陰ながら君の爲に計
つて居たんだが、これが僅かに一月の間に、全然反對の結果を現したから、實に
恐入つてるのさ。今日の昇進なんざ、實に意外で、社長に云聞けられた時には、
私は自分の耳を疑がつた位なんだ。けれども、靜かに考へて見ると、此は何でも
君が深く謀る所があつて、或目的の爲に自分の意志を屈けて、俄かに活動し初め
た、其結果に外ならないと思ふんだよ。君、さうだらう。」

勝三が順太郎の顔色を見得たら、一層疑團を大きくしたかも知れぬが、疎らな
軒燈の火光にも順太郎は顔を背向けて居た。

「其様譯ではないのです。私にも實に意外なので、社長さんが何で私を重用ひ
ようとなさるのか、如何考へても解りません。ですから、今夜諸君が祝宴を開い
て下さつたのは、深く謝するのですが、自分に思當る昇進なら嬉しいとも思ひま
すが、さうでないんですから、諸君が杯を賜さる都度に、何だか恐ろしい様で
してね、戦々兢兢として居た位ですよ。」

「さうか知ら。」と、勝三は尙ほ疑團を懷いて居る語調で、「だけれど、彼時以來、
君の舉動が全然一變したんだからね。」

「彼時つて、何時の事です。」と、順太郎は何も思當る事のないらしい、極めて無
邪氣な語調だ。

「彼時つて云ふのは彼時さ。それつ、渡瀬と三人で、春日で飲んだ日さ——君を
渡瀬へ紹介した時の事さ。」

「そうですね。自分では變つた意でないんですがね。」と、順太郎は平然たる
様子で、「尤も、私は従來の様では不可いから、誠實に勉強して見よう。世に立た

うと云ふには、如何しても信用を得なきやアならない。それには誠實に勉強しな
 きやアならない。それでなきやア駄目だと思つて、大いに奮發して居る意ですから、
 それで様子が變つた様に見えただんでせう。」

「さうか知らん。」と、勝三は尙ほ順太郎の辯解に服さぬらしい。

丁度停留場に電車が來たのを認めたので、順太郎は勝三を促して電車に乗つた。
 電車に乗ると、車内の暖かさに勝三は酔が發したのか、窓に頭を倚せると、直ぐ
 に眠つた様に見えた。順太郎は赤坂の山下で勝三と別れて、吻と息を吐いたが、
 原宿の我家に歸つて初めて稍心を安んじ、茶の間に入るより、ぐつたりと倒れる
 様に坐つた。

於禮は何時になく順太郎の酒臭きに、眉を擧めながら、

「順さん、大層酔つてお居での様だね。」

順太郎は煩擾さうにインパネスを振り捨て、柱に背をもたせて頭を押へながら
 「阿母さん、冷水をお呉れ。」

「絹や、玻璃鐘に水を持つておいで。」と、お禮は下女のお絹に命じて水を取寄せ、
 手ら進めながら、「其様にお酔ひで、萬一體に降つたら如何お爲ですよ。何所で其
 様にお飲みだつたの。」

順太郎は冷水を一息に喫乾し、長く息を吐いて、

「自分で好んで喫んだんぢやないよ。商店の人達が祝宴を開いて呉れて、祝盃だ
 くッて呉れたもんだから、飲まない様に爲て居たけれども、何時か酔つちまつ
 たんだ。」

お禮は首肯しながら、「祝宴と云つて、何か御店に御愛度い事でもあつたのか
 ね。」

「いゝえ、私の昇進を祝ふんだつて、一同で私を料理店に招待して呉れたんだ。」
 「えつ、お前さんが昇進お爲ですつて。」と、お禮は覺えず乗出した。

順太郎も母の喜ぶ顔を見ては、有聲に心地よく、覺えず微笑みながら、

「私が今日秘書役に爲つたので、内海君始め非常に喜んで、祝宴を開いて呉れた

んだよ。』

『内海さんとお云ひのは、日外お前さんが寝てお居での時に、来て下さった方だね。』

『さう。あの人始め、三浦君だの田島君だのが、大變喜んで呉れたよ。』

『親切な人達だね。』と、お禮は涙含んで、

『秘書役つて、何襟事を爲る役ですか。』

『官省で云ふと、秘書官の様なものだがね、商店の秘書役の方がずっと権力があつて、場合に依つては社長の代理を爲る事もあるし、社長の命令なんぞも、多くは秘書役が取次ぐのだから、一同から酷く重んぜらるゝんだよ。』

『そんな重い役なのかね。』と、お禮は嬉しい中に杞憂も交つて、『それだと何だね、お前さんの口一つで、失敗する人も出来ようと云ふものだね。何卒ね、上下に善い様に、他から憎まれない様に意を注いで下さいよ。』

『それだから、私も心配して居るんだ。』と、順太郎は癡子と考へて居る。

『それでもまあ、大三輪の叔父さんが、能く其迄にお前さんを信用して下さいつたつね。それと云ふのも、お前さんが勉強お爲だからですよ。今日も午後に、芳子さんがお入来でね、順さんが正直に能く勉強して下さいつて、御父さんも大層喜んで居ますつてお云ひでしたよ。久和子さんも此頃では、お前さんを賞めてお居でだつて、芳子さんが云つてお居でだつたからね、お前さんも此處が大事だと思つて、尙々勉強して下さいよ。』

『私も然様思つてるんだから、御母さん心配しないで呉れよ。私は寝るよ。』

『さうお爲なさい。私も今夜は嬉しい夢でも見ませう。』

順太郎は寢床に入つても、急に眠り得ないで、彼の内海勝三の事を思浮め、勝三が平生此身に何程深く注意して居たか、今夜の語で能く知れて居る、倒々油断の出来ない男だと、盡々と思ふのであつた。

復

讐

(前編終)

明治四十年十月十八日印刷
明治四十年十月十四日發行

定價金七十錢

著作者 廣津柳浪

發行者 瀧川民治郎
東京市日本橋區馬喰町三丁目十四番地

印刷者 中村彌三郎
東京市墨田區內幸町一丁目四番地

不許複製

發行所 今古堂書店
東京市日本橋區馬喰町三丁目九番地
關西賣捌 杉本書店
大阪東區南渡邊町

目書行發堂古今

リットン脚原著
安藤抱一庵譯
安藤仲太郎書

翻譯小說
聖人か盜賊か

●前編定價金四十錢
●後編定價金五十錢
●郵稅各六錢宛

中村春雨著
中村清方書

短篇小說
角

笛

●定價金六錢
●郵稅金八錢

黒木清方著
黒木清方書

家庭小說
想

夫

憐

●定價金四十五錢
●郵稅金六錢

楓村居士著
楓村清方書

軍事小說
橘

英

男

●定價金四十五錢
●郵稅金八錢

廣木清方著
廣木清方書

小說
二

筋

道

●前編定價金六十錢
●後編定價金六十錢
●郵稅各八錢宛

徳田秋聲著
徳木清方書

小說
結

婚

難

●定價金六十錢
●郵稅金八錢

目書行發堂古今

橋本青雨著 戀愛の小説 愛の犠牲 ●定價金六十錢 ●郵税金八錢	江見清水著 小説 雲がくれ ●定價金六十錢 ●郵税金八錢	廣津英浪著 小説 戀慕 ●前編定價六十五錢 ●後編定價六十五錢 ●郵税金各八錢宛	江見清水著 小説 女船長 ●定價金五十錢 ●郵税金八錢	德田秋聲著 小説 母の紀念 ●前編定價六十五錢 ●後編定價六十五錢 ●郵税金各八錢宛	正宗白鳥著 小説 誰の罪業 ●定價金五十錢 ●郵税金八錢
---	--	---	---	---	--

目書行發堂古今

柳川春葉著 小説 新夫婦 ●前編定價七十錢 ●後編定價八十錢 ●郵税金八錢宛	齋藤吊花著 小説 殘る光 ●定價金六十五錢 ●郵税金八錢	塚原澁柿園著 歴史小説 天草一揆 ●定價金六十五錢 ●郵税金八錢	德田秋聲著 小説 落し胤 ●定價金六十五錢 ●郵税金八錢	江見清水著 小説 鹿島灘 ●定價金七十錢 ●郵税金八錢	柳川春葉著 小説 心の影 ●定價金七十錢 ●郵税金八錢
---	--	--	--	---	---

目書行發堂古今

山岸英朋著

金

蒔

繪

●定價金六十五錢
●郵税金八

廣津柳浪著

復

讐

●定價金七十錢
●郵税金八

川上眉山著

新

家

庭

●定價金七十五錢
●郵税金八

徳田秋聲著

焰

●近刊

柳川春葉著

春

葉

集

●定價金四十八錢
●郵税金六

大町桂月著

一

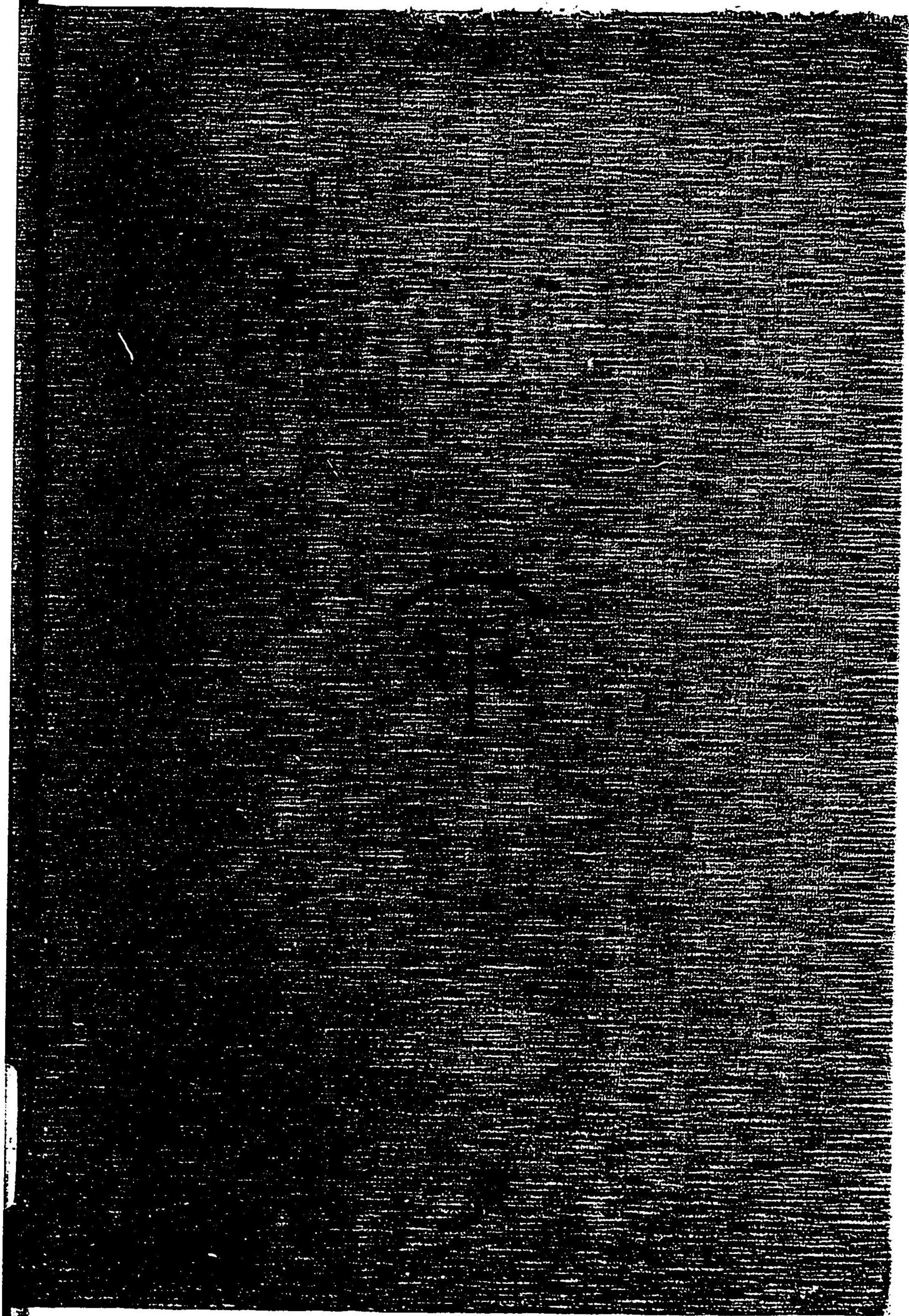
枝

の

筆

●定價金四十五錢
●郵税金六

257
2
216



205309-001-1

特12-825

復讐

広津 柳浪/著

前

M40, 41

EDV-0477

